直心是道場

神谷　昌宏

これは維摩経というお経のなかに出てくる言葉である。昔、光厳童子が毘耶離の城門を出て、閑寂の境に修行の道場を求めようとしていたとき、丁度維摩居士が城に入って来るのに出会った。光厳童子が「どこからお帰りになられたのですか」と尋ねると、居士は「今、道場から帰るところです」とのことだったので、「それは耳寄りな話です。実は私は閑寂な道場を探しているのですが、居士が行かれた道場はどこにあるのですか、ぜひ教えてください」と言うと、居士は「道場は外に求むるに及ばぬ。直心是道場、虚仮なきが故に」と喝破されたという。

直心とは何かと言えば、正直な心、素直な心、誰でも生まれながらに持っている自然の心、と言う意味である。つまり何も特別に修行などしなくとも持っているものである。これをなくさないでいれば良いわけである。禅の世界では、人間は本来「完全円満・無限絶対」のものであると教えている。

ところが現実には、我々はこの本来あるべき人間の姿を見失っている。赤ん坊の時にはすべての事を直心でやっていたのが、長じるに連れ雲がかかり、心の思いと行動が一致しなくなってくる。また本来心に思うことを無理に邪な思いへと変えてしまう。そして知らず知らずのうちに、本来の自分がなんであるのかさえ分からなくなっている状態なのである。

廓庵禅師はそのような状態から、本来の姿に戻る修行を「十牛図」に描き、頌をつけた。しかしこのような雲のかかってしまった状態自我から、本性の状態に戻すには壮絶な修行が必要であるようだ。多くの場合、雲がかかっていることにすら気づかずに生涯を終える人が多いといわれる。

話はもどってそのような修行をする場所が道場であると認識していた光厳童子が「良い道場を紹介してほしい」と維摩居士に願ったところ、即座に「直心是道場」と言われたのである。この逸話では光厳童子の考えの浅はかさが強調されるように感じられるが、そうではない。ここで童子が修行の必要性を感じていることに注目すべきである。この必要性を自覚できることがまず大切なことなのである。必要性を感じることができなければ、求めるものも存在しないことになってしまう。必要性を感じることができたならば、修行は様々な事を通して実現可能である。禅を組む修行、剣道を通して求める修行・・・・すべてその達成目標をもって臨むことができるからである。「志道」から「入門」の過程がしっ

かりしていないと、すぐに修行過程を見失い、匙を投げることとなる。

小川忠太郎範士はこの直心を解説して「らしく生きる」のが直心の現れと言われた。つまり、学生は学生らしく、教師は教師らしく、母は母らしく、父は父らしく、剣道家は剣道家らしく生きなさい。そのらしさを無理なくさらりと出せるようにしなさいと説かれる。簡単な様で難しい事である。素直な気持ちを以てしている行動が、自然に今置かれている状況の中での自分の立場と矛盾なく融合するような状態を具現する。実はこのような修行をわれわれは「百錬道場」でしてきたのである。

小野派一刀流にいう「流露無碍（りゅうろむげ）」も同様の教えである。「水は方円の器に従う柔らかなものであるが、勢いを得ると岩をも押し流す」そのような人格形成を目指しているのである。同流最高の技とされる「独妙剣」はこの水になぞらえている。

キリスト教は愛の宗教だと言われる。聖書は「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません」「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある。』とか、『あそこにある。』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」と説いている。神の国は平安の具現と捉えることができる。キリストの教えと剣道の行き着く修行の到達目標は矛盾しないのである。

卒業生はこれから高校とは違った次元の世界へと旅立つ。その場にあって、本当にらしく生きて欲しいと願う。何事にも直心で臨むという修行を具現できるよう心から祈って、稿を終える。